

朝日新聞記事に見る「図書館」イメージの変化

後藤 奈生

図書館は自身のイメージを変えようと様々な取り組みを行い努力してきた。特に話題となったのが 2013 年開館の武雄市図書館を始めとする通称 TSUTAYA 図書館である。選書や分類法、空間構成において従来の図書館とは異なる形を出したことで注目を集めた。その他にも図書館は様々な取り組みを行ってきている。このような図書館の取り組みにより、以前より図書館に関してメディアで取り上げられる機会が増えているように感じられる。

そこで本研究では、一般の人々が図書館に対して持つイメージが年の経過とともに変化しているのかを調査し、変化があるとすればどのように変化してきたのかを図ることを目的として、新聞記事の内容分析を行った。新聞記事においてどのように語られているかを明らかにすることで、人々が図書館に対して持ちうるイメージを読みとることを考えた。

対象とした記事は朝日新聞に掲載された見出しに「図書館」という語を含む記事である。見出しに「図書館」という語を含む記事を対象とすることで図書館を主として取り扱っている記事を分析対象とした。変化を見るため 1996 年、2006 年、2016 年の三年分の記事それぞれ 257 件、447 件、495 件を調査した。はじめに 1996 年～2016 年の 20 年分について「図書館」を見出しに含む記事数の推移を調査した。その後、前述の 3 年分の記事（総計 1,199 件）について文字数、掲載面、発行社、館種、取り上げられている側面、記事のニュアンスを調査した。

「図書館」を見出しに含む記事数の 20 年間の推移から、「図書館」に関する記事は全体として増加傾向にあることが分かった。平均文字数からは大きな変化は見られず、掲載面では地域面で多く取り上げられており、社会と総合に関する紙面でも取り上げられやすいことが分かった。発行社による記事数も変化していた。館種は公立図書館が最も多く、各年の分析対象の記事数中の割合は年が経つにつれ高くなっていった。取り上げられている側面を「イベント」「図書館サービス・利用」「開館・閉館」「建設計画」「運営・制度」「図書館資料」「図書館での出来事」「作品の題材」の 8 つのカテゴリーに分類したところ、イベントに関する記事が多く、図書館を主とする話題はイベントが取り上げられやすいことが分かった。記事のニュアンスとしては好意的な記事が多く、割合の変化から 1996 年より 2006 年と 2016 年はその傾向が強くなっていると考えられる。

図書館を主とする話題は地域での取り組みといったような身近な話題が取り上げられやすく、またそれらは好意的に語られやすいと考えられる。一部否定的とした記事も見られたが、全体として図書館は好意的に語られ、その傾向は強くなっていることが分かった。

(指導教員 松林麻実子)